

## ネロとパトラッシュ —「フランダースの犬」における二つのベルギーの融合—

### Nello and Patrashe: Merging of Two Belgiums in “A Dog of Flanders”

井 川 恵 理  
Eri IKAWA

‘Nello and Patrasche’ from the story “A Dog of Flanders” (1872) by Ouida (Marie Louise de la Ramée, 1839–1908) is a phrase representing a bond never to be untied and ignored poverty in society. The image of this tie has been handed down through generations in Japan since the first Japanese translation by Shiken Hidaka in 1908 and through numerous reproductions of the story in various media including a TV animation series in the late 20<sup>th</sup> century. However, little has been discussed on the birthplaces of the two main characters, Nello, from the Ardenne, and Patrasche, from Flanders. Ouida seems to reflect on the difficulties of merging differing cultures, considering the complicated history of Belgium, through her two protagonists. The actual and cultural (and religious) borders of the Ardenne and Flanders are reflected in the curious relationship between the adolescent boy Nello, and his companion Patrasche. These complex concepts will be discussed in this paper.

#### 1 『フランダースの犬』日本における受容の歴史

##### 1.1 動物愛護・友愛から女性の自立の物語・ベルギーへの「里帰り」

「…いや、人ばかりではありません。無心の動物も、人の愛には愛でこたへます。／いま私が皆さんにお目にかけるこの本は、貧しい子供とその愛犬との美しい愛の物語なのです。／これは、英國のウイーダ女史の原作を、皆さんにわかりやすくお話するつもりで書いたものであります。」昭和21（1946）年8月、偕成社版の発行にともない、池田宣政は翻案であることをさりげなく伝えつつ、子どもと犬の愛情物語であることをまず「著者のことば」で伝えている。この立場は、本作を日本語に初訳／翻案した人物と言われている日高柿軒（本名、善一）による紹介の遺伝子を引き継ぐものとも言える。

…殊に忠犬が孱弱き主人を慕いつつ榮華を余所にして死地に就くの健気さ、一読不知不

識動物に対する愛護の念自ら禁じ能はざるものあり。是れ独少年少女の読物として優れたるのみに非ざるべきを信ず。

明治四十一年九月 不忍池畔に於いて 譯者識す

〈一部引用者により文字変更〉

『フランダースの犬』東京 内外出版協会 1908 明治41年)

「忠犬」「～死地に就くの健気さ」といったある時代の美意識が垣間見える紹介文となっているが、以降、本作はこのテーマからそれることなく、さまざまなメディアで展開されていく。アメリカ滞在中の本田増次郎氏より紹介されたという本書は、原作者ウィーダ Ouida (Marie Louise de la Ramée, 1839–1908) の没した年に刊行され、その後、日本においておびただしい数の翻案、翻訳、絵本作品が生み出される。「少年少女向け」の翻案から、原作の細部を再現した翻訳として村岡花子訳、2003年の野坂悦子訳など各時代を代表する作品が生まれている。1975年のテレビ・アニメーション作品として登場してからは、再放送が繰り返され<sup>1</sup>、番組改編時期の3月や9月になると、涙なくして観ることのできない作品としてそのクライマックスシーンだけが再生される作品ともなっていく。こうした再生文脈のキーワードは、1908年時点から一貫して「保護者を失い貧しさの中で生きる子ども」と「彼を命がけで支える犬」の「ゆるぎない友情」である。犬という存在に特別な愛情を注いだ作者だからこそ産み出すことができた作品といえるであろう。同時に、最期にネロとパトラッシュが一つになってルーベンスの絵を観るという希望を叶えることができたことのせつなき幸福感とともに、貧しさゆえに子ども——原作における後半での年齢は10代半ば——の才能を認めなかった世間への非難に、涙を流す自分がいずれの側にいるかの居心地の悪さを感じさせる感覚を合わせ持つ。「かわいそうな少年と犬に涙する視聴者」向けの名場面集というイメージに一石を投じたのは、丸尾みほによる脚本、劇場版アニメーション『フランダースの犬 The Dog of Flanders』(1997)である。脚本の焦点は、ネロとパトラッシュ亡きあとの少女アロアが最愛の友を失う原因となった社会を自らの手で変えていく意識を持つ人間となる、その自立への物語となっていることである。

こうした日本での「フランダースの犬」の多様な再生物語と旅行客が絶えることなくアントワープを訪れネロとパトラッシュの足跡をたどろうとする姿は、舞台となった土地ベルギーの人々の目にもとまり、逆輸入の形で「二人」の姿が彫像として置かれることとなったり、1997年から立ち上げられ、2016年末現在まで多角的に記事を掲載し続けている大島一悌(カズヨシ)氏のインターネットサイト [patrasche.net](http://patrasche.net) は、本作品や周辺文化について知りたいと思う者の聖地とも言える場所となっている<sup>2</sup>。こうした現象を現地の映像アーティストがドキュメンタリーとして映像化し、国会図書館での初版撮影の折には、筆者自身も立ち会う機

会を得た。

本論では、日本の翻訳児童文学作品として息長く再生されてきた本作に、作者ウィーダが、上記のような感情を動かす作品要素の仕掛けにくるみながら、ベルギーという「国」の複雑な要素を意識したキャラクター創造を行っている可能性を考察する。

## 1.2 原作者ウィーダ、犬、ベルギー

作者ウィーダは1839年1月1日 イングランド南東部バリー・セント・エドモンズ Bury St Edmonds 生まれ、母、祖母とともにロンドンに移る。父はフランス人で家にいることが多くはなかったと言われている。1871年8月ロンドンを離れ、ベルギーのブリュッセルに発ち各地を旅しながら数週間滞在する。ドイツ、チロルへも旅行している。1874年、イタリアのフィレンツェに渡り、以後、イタリアに住む。1893年母の死。1894年、北西部の村ルッカに移る。1908年1月25日同地にて肺炎で没す。多くの犬たちとともに過ごした生活だったという。ベルギー滞在が決して長いわけではない。1872年出版の *A Dog of Flanders and Other Stories* (『フランダースの犬とその他の物語』) において、その繊細な感性を活かし、短い滞在ながらも、農民たちの精神構造を洞察していることは、それまでの彼女の小説で土地の領主層にあてがっていた「行き当たりばったりの性格付け」に比べると驚嘆に値すると、評価されている<sup>3</sup>。そしてとりわけ彼女が「そのベルギーの物語群では、人間にしる動物にしる、抑圧される側への深い共感があり」、「ウィーダの博愛主義・人道主義が侮りがたい力となって」<sup>4</sup>いることが伝わることも加えている。ベルギーの旅路で、彼女は初めて「農民」の世界を描き、その心理もまた、ネロたちを包み、そして追い込んでいく環境として、機能していくことになるのである。

同時に、上に触れたように、作者が持つ「犬」という存在への特別な思いも、「フランダースの犬」の骨格となっていることは言うまでもない。ウィーダは、G. C. ウィリアムソンへの手紙で、「とても神の民 (God's people) とは言えない多くの男性よりも、神の創りたもうた生き物を愛しています。」<sup>5</sup>と伝える。犬たちが、「神の創りたもうた生き物」——‘God's creatures’として、人と並ぶべき存在であること、より強い情を感じる対象として受けとめていることが明確に記されている。ウィリアムソンのもとで命を落とすことになったアイリッシュ・テリアへの想い、人の友としての存在でありながら、その権利がないがしろにされていることについて、何度も繰り返しているという<sup>6</sup>。

## 2 登場人物／動物の出自

### 2.1 ネロ、パトラッシュ

農民と領主、動物と人間、使われる者と使う者、神のもとに生活しながらも、同等の扱いを受けることのない境界線が歴然としてある。「フランダースの犬」においては、その境界

を越えようとする人物や動物の意志が、物語を動かしているともいえる。ウィーダがその感性を働かせて「境界線」の向こうで抑圧された者たちへ共感の眼差しを投げかけるとき、ベルギーという「国」を構成する要素に存在するもう一つの境界線を感じ取ったことが、登場人物と動物の出自に現れているのではないだろうか。主な登場人物および動物についての出自がどう描かれているか、原文をみてみよう。

Nello and Patrasche were left all alone in the world.

They were friends in a friendship closer than brotherhood.

Nello was a little Ardennois—Patrasche was a big Fleming. (Ouida, 1873, p. 1. 下線筆者)

物語冒頭、ネロはアルデンヌ生まれ、パトラッシュはフランダースの出身と告げられる。たった二人、この世に取り残され、「血を分けた兄弟よりも友情の固い友だった。」とその絆の強さが強調される。ネロ (Nicolas の愛称) は、物語において、芸術家が描きたくなるような美しさを持つ「アルデンヌの子ども little Ardennois」という表現でも呼ばれ、その出自がアイデンティティとして重要であることも伝えられる。「黒く、おごそかで、やさしい目をした美しい子ども」であり、そのつややかな頬、喉にかかる金髪の巻き毛など、そばを通り過ぎる芸術家たちがパトラッシュとネロが緑の荷車を引く姿をみると、描きたくなるような姿であったことを伝えている<sup>7</sup>。その子どもの姿はまるでルーベンスの絵画に描かれる、「おだやかでおごそかで無垢な幸せな子ども」のようだと伝え、彼らの最期を見守ることになる芸術家の作品に言及していることもまた注目される。

一方、パトラッシュ Patrasche は「フランダース」出身の犬であると同時に、フランダースとブラバントの日陰なき道を一日中休む間もなく歩き続けた労働犬の両親のもとに生まれたと描写されている。この「フランダース」と「ブラバント」の地名が指す地域については、注意を要する。ウィーダ自身が旅をしたのは1871年とされているが<sup>8</sup>、フランス革命により消滅したブラバント公国から、ウィーン議定書で1815年から1830年にネーデルラント連合王国に帰属、1830年から1995年までベルギーの帰属となっている地域であると考えられる。1995年以降は、北のフレミッシュ・ブラバント Flemish Brabant、南のワロン・ブラバント Walloon Brabant、そして首都ブリュッセルを包む地域に分かれている。フランダースはその西の地域であり、パトラッシュの親たちが、かなりの距離を労働により旅する犬たちであったことが示唆されている<sup>9</sup>。

## 2.2 ジェハン、金物屋、アロア（野坂訳ではアロワ）

ネロを育むジェハン・ダース Jehan Daas は次のように設定されている。兵役経験があり、80歳にして娘をアルデンヌで亡くしている<sup>10</sup>ことから推測すると、フランダースからアルデ



ンヌに行き戦争体験等ののち、再びフランダースに戻ってきているとも考えられる<sup>11</sup>。ベルギー南東部のアルデンヌ地方はフランス北東部、ルクセンブルク西部にもまたがる「森林・荒地の多い丘陵地帯」<sup>12</sup>であり、その主な住民はワロン人 Walloon であり、フランス語系のワロン語を話す。一方、フランダース（フランドル）は「ベルギー西部・オランダ南西部・フランス北部を含む北海沿岸地域」であり主な住民はフラマン人 de Vlamingen、言語はオランダ語のフラマン語である〈地図参照〉。ダース氏は、この二つの大きな差異のある地域を歩き来してきた人物として設定されている<sup>13</sup>。

パトラッシュのもと飼主である金物屋はブラバントの出身 Brabantois として描かれている。パトラッシュの項で述べた通り、ブラバント地域は、ナポレオン戦争以前、以後、そして現在と、帰属の「国家」が変わる激動を経験する土地となる。現在のベルギーの中心であり、ベルギー国歌「ブラバントの歌」にもその名称が用いられているが、フランス語、オランダ語、ドイツ語での国歌<sup>14</sup>というように、複雑な道のりを象徴する地でもある。本物語の中でそのブラバント人は、幼いというだけでパトラッシュを安価 (a small price) で売ったその男は「酒飲みで冷酷な」人物として描写される。冷酷さを描写するのに用いられる brute は原義はラテン語の「重い」であるが古フランス語としては語義「獣のような」があり、犬としての「パトラッシュ」の存在より、神に近いはずの「人」より「獣」に近いものであることをも示している。彼のもとでパトラッシュが受けた仕打ちは「地獄の人生 a life of hell」であったこともこの語 brute から導かれる。そして、His purchaser was a sullen, ill-living,

brutal Brabantois とあるように、brutal と Brabantois との頭韻もまた、著者の地名選択の一つの理由であったとも考えられる。同時に、このあとの男の描写からは、鋳掛屋という職業そして、ロマ、トラベラーといった被差別者であったことも推測される<sup>15</sup>。その男はしかし、酔った勢いでの喧嘩が原因であっけなくこの世を去る<sup>16</sup>。これにより、パトラッシュにとっての後顧の憂いはなくなるが、彼の命が委ねられる新たな飼い主とその生活が新たな運命を紡いでいく。

アロアとその家族は水車小屋に住む。父親は粉屋であり、村一番の農夫であった。アロアの身体的特性としてスペイン的要素が描かれていることも興味深い。それは、「スペインの支配が多くのレストランの顔にのこしてきたように」バラ色の丸い頬を「黒い瞳」が魅力的にしている<sup>17</sup>。おそらく、ハプスブルグ朝がヨーロッパ全土に与えた影響を継承する少女であることを示唆し、また、husbandman と描写されているが、その父親もまた、この土地に住む者たちに支配を及ぼす存在として描かれている。

### 3 『フランダースの犬』に描かれるベルギーの姿

#### 3.1 教会への祈りと労働の成果

「ベルギー」という名称で国が独立して間もない時期、ウィーダは、この土地を旅している。どのようにその風土を理解し、上記のような登場人物と犬の出自を決定していったのだろうか。物語の中の描写をまず確認していきたい。

商業都市アントワープの喧騒と教会について、作者は、その石造りの建物が、くねくねと曲がった道のあちこちに現れ、家々の門や宿屋がひしめき合うように建てられていると描写している。教会の鐘の音、古の聖域も、賑やかで忙しい現世には遠い世界となっていることが描かれる<sup>18</sup>。また、ビジネスの勝機を求めてくる人々にあふれた都市だけではなく、ネロたちの住む世界においても、農作の成果を問う世界が神への祈りを捧げる場と同様の主となっていることがさりげなく描写される。「穀物をその（老いた）風車小屋以外の場所へ運ぶことは」さながらいつも通う古びた教会以外の場所に行くのと同じように「不信心」でもあるかのように考えられていた、と物語の開始三段落目で伝えている。

そうした労働の成果が神への祈りと等価となる社会の中で、アロアの父は、村で最も富める者として村民を従え、アロアに自分の富を残すことが未来の息子たちに財産を残すことに結びつくことを期待している。15を迎えたネロと12歳のアロアとの近さを心配する父親は、同時に、財産の継承とも、富に結びつく労働とも縁がないと感じられるジェハン・ダースの孫に厳しい表情を向け、また、冷たい言葉を投げかけることになる<sup>19</sup>。それは、富という尺度ではなく、（おそらくは自らの伴侶との比較して）娘への愛情の深さや穏やかな性格をネロから読み取ろうとする妻と対照をなす。「いい青年だし、誠実よ」と言いながら眼差しを

向ける a Calvary「キリストはりつけの像」に象徴されると言ってもよい。さらにその像は‘... throned above the chimney with a cuckoo clock and a Calvary in wax.’<sup>20</sup>とあり、「成果」「実績」を象徴するかなのような clock と対比されていることも興味深い。慈悲を象徴する十字架と現世の無慈悲さを対比する場面となっている。

村の者に「バース Baas」「ご主人様 master」と呼ばれることがフランダースの農民の最高の荣誉であること、それは、兵士として世界をみてきたはずの老人ダースにとっても同様であり、ダース自身がそうした労働の対価の恵みを望んでいたと言う意味では、アロアの父と変わらぬ価値観の中に生きていたことも示唆している。

### 3.2 労働を担う犬という存在

こうした労働への価値観を背負うことになるのが本作におけるパトラッシュである。パトラッシュはネロとジェハン・ダースにとって欠くことのできない存在「アルファでありオメガ their alpha and omega」として描かれる。「パンの稼ぎ手でもあり、牧師」でもある。崇高な友であるとともに「労働犬」として描かれるその犬は、彼らに出会うまでの間、暴言が餌であり、鞭が洗礼であり、それは「キリスト教の地が故」<sup>21</sup>という作者最高の皮肉をこめて描かれる世界で生きていた。最初の飼い主の説明で述べた通り、それは地獄を生きるに等しい。1897年版において、その人間の所業そのものが、キリスト教信者が進行を示す方法なのだとまで付している<sup>22</sup>。

犬を愛した作者による痛烈な皮肉によってフランダースは描かれる。アルデンヌ生まれの少年、フランダース生まれの犬、ともに「フランダース」の人々に苦しめられる構造となり、その背景として、神への祈りと労働とを対等にする日常があったことが考えられる。

## 4 ウィーダの旅したベルギー

### 4.1 ウィーダとベルギー、同時代の旅行記にみるベルギー

ウィーダがブリテン島を離れ、大陸に旅立った背景については、「ロンドン・イングランドに見切りをつけ」たからというのが、各種伝記作者に共通した表現である。ビグランドは彼女の失恋もまた理由の一つであったと伝えている<sup>23</sup>。この頃またヨーロッパは、情勢が一時安定し、旅というものが比較的安全に行われる時期だったとも言われている。その好機を得て、作者は、ブリュッセルに滞在し、アントワープ、ブルージュ、アルデンヌを旅行する<sup>24</sup>。

土地を離れる理由があり、情勢が安定していたとはいえ、女性が旅立ち生活を続けていくことはたやすいことではなかったはずである。しかし彼女には、書き手として自立し、経済力もあったのである。母親と犬をつれ、ベルギーを訪れたという<sup>25</sup>。

ベルギーは、1830年にオランダから独立し、1839年にヨーロッパから独立を認められて

いる。しかし、内的には、北部オランダ語系のフラマン語圏、南部フランス語圏のワロン語圏の対立は根深い。

19世紀末にベルギー・ブリュッセルを訪れた旅行者は「ミニチュア・パリ」ともいえる「フランス」的空気を感じ取っている。

We visited other places of interest in Brussels, and drove about its streets both on this occasion and two months later on, when I visited it a second time; and I feel bound to say that, although it is certainly a fine city, and contains many monuments of which the Belgians are justly proud, I fail to see what there is to justify the title of a 'miniature Paris,' which is sometimes given to it. I found the French language universal in Belgium. (Dobbie, pp. 139-140)

フランス語が当初公用語とされてきた様子が伝わる描写である。

また、フランダースとワロン地域について、本作品が出版された頃の旅行手引き書はどう描写しているかをみてみよう<sup>26</sup>。「土地借用者と地主の関係はきわめてよい。基本的には借用者は地主に逆らわない。」<sup>27</sup>「逆らわない」ことすなわち地主の権力の強大さも表現していることにならないだろうか。ウィーダは、的確に「ベルギー」を構成する民族集団、農民意識を把握し、その境界線を越える存在を物語に置き、展開させている。

#### 4.2 現在のベルギー人による二つのベルギー像

フラマンとワロンの境界の緩衝地帯かのように、ベルギー中心には、首都ブリュッセルが置かれ、さらにヨーロッパ連合の中心となる EU 本部や NATO 機関の集まる国際都市である。「ゲルマンとラテンの融合」を象徴する地域とも言える。1993年には、2言語地域の連邦制となり、1) オランダ語圏の北部、2) フランス語とドイツ語圏のワロン地域、3) フランス語、オランダ語の2言語併用のブリュッセル首都圏として地域政府が設けられている。21世紀においては、そのような単純な2項対立と中間点という構図ではないことは国際情勢から明白であるが、現代においても、「ベルギー人」と異国で受けとられる人々が、自分に示された「ベルギー」観に違和感を示すことがある。2005年に愛知万国博覧会で名古屋在住のベルギー人留学生サラ・レクラークさんが、自国を象徴するベルギー館を訪れ、抱いた感想である。3つの行政区分が正確に示された展示には満足している彼女はこう加えている。「注文をつけるとすれば、説明が日本語と英語のため、どうしても英語に近いフランダースが優先され、フランス語を話す私たちワロンの影が薄く感じてしまう。これは人口で少数派にあるワロン人としてのやっかみなのかもしれないけど。」(『毎日新聞』2005年6月18日朝刊 東海版19面) この境界を感じる感覚はその後も消えることはなく、ベルギー情勢を追うたびに、浮き出てくる事象でもある<sup>28</sup>。

## 5 結論

「フランダースの犬」が人と動物のゆるがぬ絆を描いた作品であること、また、頼る人なく、才能を見出されることなく、この世を去ることになる子ども・青年とそれを見捨てた社会との溝、そのあり方を問う作品としても多くの心に訴えて今日がある。もう一方、本作をベルギーという国の成り立ちからみると、その構成要素としての異文化の表象、それをアルデンヌのネロ、フランダースのパトラッシュという姿におきかえることで、その境界線を越え、一つになる姿を描くという隠れたテーマもまたウィーダの視点にはあったのではないであろうか。動物と人とが一つの墓に入ることが物語の最後に語られる。洗礼を受けたもの、受けていないもの、異なる言語を話すもの、そうした差異を溶かし、一つにしていく浄化が、作者の目には映っていたのではないだろうか。

最後にもう一度、ネロとパトラッシュの姿を描く冒頭の描写を振り返りたい。

They had dwelt together almost all their days: both were orphaned and destitute, and owed their lives to the same hand. It had been the beginning of the tie between them, their first bond of sympathy; and it had strengthened day by day, and had grown with their growth, firm and indissoluble, until they loved one another very greatly. (Ouida, 1873, p. 1)

## 注

- 1 テレビ・アニメーション版（テレビ局からの聞き取りによる）初放映 1975年（1～12月）全52回 フジテレビ、再放送 1979、1983、1986～1987年チャンネルアルファ、2002～2003年 WOWWOW、東海テレビ（10月当初土曜早朝、その後月～木早朝へ）、2004～2005年 NHK衛星2 平日昼など。
- 2 大島一悌（カズヨシ）氏製作 <http://www.patrasche.net/nello/>
- 3 Bigland, 76. ビグランドは、ウィーダの社会の上層の人々の描写を ‘slap-dash, hit-or-miss methods of characterization she had meted out to the lords and ladies of her previous novels.’ と評している。
- 4 Bigland, 76.
- 5 Williamson, 9.
- 6 The same old subjects were continually referred to. in the last letter but one that I had from her she says, ‘The rights of animals are disregarded, even by many of those who are their friends,’ and then, quite unable to resist the chance of giving me a dig—‘as you disregarded your poor little Irish terrier’s.’ (Williamson, 11)
- 7 Ouida, 1873, p. 14.
- 8 Stirling, 1957, p. 78.
- 9 ‘Patrasche had been born of parents who had laboured hard all their days over the sharp-set stones of the various cities and the long, shadowless, weary roads of the two Flanders and of Brabant.’ (Ouida, 1873, p. 5)
- 10 ‘When old Jehan Daas had reached his full eighty, his daughter had died in the Ardennes, hard by Stavelot, and had left him in legacy her two-year-old son.’ (Ouida, 1873, p. 3.)

- 11 Ouida, 1873, p. 3.
- 12 Ardenne の項 松田徳一郎編集代表『リーダーズ英和辞典 第2版』
- 13 'When old Jehan Daas had reached his full eighty, his daughter had died in the Ardennes, hard by Stavelot, and had left him in legacy her two-year-old son.' (Ouida, 1873, p. 3)
- 14 世界の国歌— National Anthem 「ベルギー王国の国歌 プラバントの歌」 <https://anthem.cool-navi.info/europe/belgium.html>
- 15 'His purchaser was a sullen, ill-living, brutal Brabantois, who heaped his cart full with pots and pans and flagons and buckets, and other wares of crockery and brass and tin, and left Patrasche to draw the load as best he might, whilst he himself lounged idly by the side in fat and sluggish ease, smoking his black pipe and stopping at every wineshop or café on the road.' (Ouida, 1873, pp. 5–6)
- 16 Ouida, 1873, p. 13.
- 17 'Little Alois was only a pretty baby, with soft, round, rosy features, made lovely by those sweet dark eyes that the Spanish rule has left in so many a Flemish face, in testimony of the Alvan dominion, as Spanish art has left, broadsown throughout the country, majestic palaces and stately courts, gilded housefronts and sculptured lintels, — histories in blazonry and poems in stone.' (Ouida, 1873, pp. 25–26)
- 18 Ouida, 1873, p. 18.
- 19 Ouida, 1873, pp. 43–44.
- 20 Ouida, 1873, p. 28.
- 21 Ouida, 1873, p. 5.
- 22 "To deal the tortures of hell on the animal creation is a way which the Christians have of showing their belief in it." (1873年版にはない描写。) Ouida, 1897, p. 8.
- 23 She had done with England: what she refused to admit was that England had done with her. All her storming of the Victorian stronghold had been in vain. Through her own actions she had become the wrong sort of public figure, and although invitations to her parties had at first been eagerly sought after by well-known men, her scornful attitude towards her own sex and her extraordinary behaviour had antagonized their women-folk to such an extent that the doors of the very houses she wished to enter stayed firmly shut against her. (Bigland, p. 73)
- 24 Interested by her London life, but still as irremediably eager for something else as she had been in Bury St. Edmonds, Ouida set out for a continental holiday in August, 1871—the August during which a statutory Bank Holiday was observed for the first time. The Franco-Prussian war had ended only a few months earlier, but although Theirs had suppressed the Commune with a ferocity that reminded people of the excesses of Robespierre, and Mazzini had remarked that, by seizing Alsace-Lorraine, Germany had made another war inevitable, tourists were once more welcome across the Channel. (Stirling, p. 78) (下線筆者)
- 25 By 1871 London had nothing more to offer Ouida..., she decided to travel. She had money; she had freedom; she had before her the whole of Europe from which to choose her domicile. So in August she set out with her mother and her dog, and began by visiting Belgium. (Ffrench, pp. 59–60)
- 26 *A handbook for travelers in Holland and Belgium* (London: J. Murray, 1876)
- 27 The relation existing between landlord and tenant in Belgium is, as a rule, a friendly one. The tenant seldom opposes the wishes of his landlord, either in political or religious matters, and though sometimes this is due to fear of the consequences of such opposition, generally, and especially in the Flemish parts of the country, the views of the tenant and landlord really coincide. (Rowntree, p. 129)
- 28 Martin Kettle, 'Bombers take advent of Belgium's history as a country divided' *The Guardian*. Tuesday, 22<sup>nd</sup> March, 2016. Retrieved from <https://www.theguardian.com/commerntisfree/2016/mar/22/bombers-take->

advantage-belgiums-history-country-divided on 31st January, 2016.

#### 参考文献、資料：

◇『フランダースの犬』原作、翻訳、翻案作品

Ouida, *A Dog of Flanders and Other Stories* (London: Chapman & Hall, 1873)

Ouida, *A Dog of Flanders and Other Stories* (Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1893)

Ouida, *A Dog of Flanders, a Christmas Story* (Boston, L. G. Page and Company, 1897)

池田宣政著（翻案）『フランダースの犬』（偕成社 昭和21年）

野坂悦子訳 『フランダースの犬』（岩波少年文庫 2003）

日高柿軒訳 『フランダースの犬』（東京 内外出版協会 明治41年）

村岡花子訳 『フランダースの犬』（新潮文庫 昭和29年）

#### ◇映像作品、ウェブサイト

Dienderen, An van, Volckaert, Didier (Directors), *Patrasche: A Dog of Flanders, Made in Japan* (2007)

日本アニメーション製作 黒田昌郎監督 吉田義昭脚本『フランダースの犬 A Dog of Flanders』（1975年フジテレビジョンにて放映）VHSビデオ版

日本アニメーション製作 黒田昌郎監督 丸尾みほ脚本『フランダースの犬 The Dog of Flanders』（1997年劇場公開）DVD版

Brodie, Kevin (脚本・監督), *A Dog of Flanders* (Warner Bros., 1999)

サイト：大島一悌製作「フランダースの犬 A Dog of Flanders」

<http://www.patrasche.net/nello/index.html>

#### ◇ウィーダ伝記

Bigland, Eileen, *Ouida, the passionate Victorian* (New York: Duell, Sloan and Pearce, 1951/ London: Jarrolds 1950)

Ffrench, Yvonne, *Ouida: a study in ostentation* (London: Cobden-Sanderson, 1938)

Stirling, Monica, *The fine and the wicked: the life and times of Ouida* (London: V. Gollancz, 1957)

Williamson, Dr. G. C., *Behind my library door: some chapters on authors, books and miniatures* (New York: Dutton, 1921)

藤野幸雄編訳『世界児童・青少年文学情報大事典』「ウィーダ」の項（勉誠出版 2000）

#### ◇ベルギー関連

*A handbook for travelers in Holland and Belgium* (London: J. Murray, 1876)

Beevor, Antony, *Ardennes 1944* (Penguin Books, 2016)

Boulger, Demetrius C., *Belgium of the Belgians* (London: Sir Isaac Pitman & Sons, 1911)

Dobbie, A. W., *Rough notes of a traveler taken in England, Scotland, France, Holland, Belgium, Switzerland, Italy, Germany, Austria, Greece, Egypt, Ceylon, and elsewhere* (London: Simpkin Marshall, Hamilton, Kent & Co., Limited, 1890)

M. E. P. B., ('Preface' に本署名のみ。詳細不明), *Bubbles and Ballast: being a description of life in Paris during the brilliant days of the empire: a tour through Belgium and Holland, and a sojourn in London/ by a Lady.* (Baltimore: Kelly, Piet and Company, 1871)

Pearce, W. C., *History of Holland and Belgium: with coloured map and illustrations* (Collins' school series) (London:

- William Collins, Sons, & Company, 1879)
- Rowntree, B. Seebohm, *Land & Labour: lessons from Belgium* (London: Macmillan and Co., limited, 1910)
- デュモン、ジョルジュ＝アンリ著 村上直久訳 『ベルギー史』(白水社 1997)
- アールツ、エーリック著 藤井美男監訳「エーリック・アールツ教授講演会録」『中世末南 ネーデルラント経済の軌跡』(九州大学出版会 2005)
- 栗原福也監修『オランダ・ベルギー』(新潮社 1995)
- 玉木俊明著『近代ヨーロッパの形成 商人と国家の近代世界システム』(創元社 2012)
- 地球の歩き方編集室編『地球の歩き方 aruco 016 ベルギー '16〜'17』(ダイヤモンド社)
- Dienderen, Dr., An van, Ghent University (メールによるインタビュー)
- 羽場久美子編著『EU (欧州連合)を知るための63章』(明石書店 2013)
- ベルギー政府公式ページ <http://www.belgium.be>
- マイ、マンフレッド著 小杉尠次訳『50のドラマで知る ヨーロッパの歴史 戦争と和解、そして統合へ』(ミネルヴァ書房 2010)

#### ◇メディア論

- 井上英明著「アニメの中のフランダースの犬」児童文学翻訳作品総覧第7巻【アメリカ編】明治 大正 昭和 平成の135年翻訳目録(ナダ出版センター 2006) pp. 77-92
- 清水知子著「犬はあなたで、犬はわたし」岩渕功一編『超える文化、交錯する境界』(アジア理解講座③)(山川出版社 2004) pp. 44-65